

会長挨拶

京友会会長 津田 仁

コロナ禍は三度目の秋を迎えました。加えて、ロシアのウクライナ侵攻は世界秩序を一変させ、国際社会は混迷を深めています。先行きが見通せず、様々な制約がある中ですが、同窓会員の皆さまは、いかがお過ごしでしょうか。

さて、私こと、7月9日の令和4（2022）年度総会において、山崎高哉前会長の後を引き継ぐ新会長という大役を仰せつかりました。何卒宜しくお願い申し上げます。1979年に当時のCコースを卒業して出身地の大阪府に戻り、その後四十数年の二分の一ずつを、学校現場と教育行政の現場で過ごしました。昨年大学を定年退職し、現在は、訪問型の子育て支援を行うNPO法人理事長を務めるとともに、全国展開している専門学校グループの一員に加えていただき、学生の「職業人教育」に携わっています。いわゆる「一条校」以外で、幼児から学生までの育ちと学びに関わるのは初めてで、新鮮な日々を送っています。

卒業後は大学と疎遠になっていましたが、20年ほど前になるでしょうか、審議会の座長を竹内洋先生にお願いに上がったことを契機に、京都大学にお世話になる機会が増えました。とりわけ、教育学部の先生方には、教育行政に対するご助言、各種教員研修、現場の実践研究のご指導など、多方面で大変お世話になりました。

その中で私が感銘を受けましたのは、先生方の発信のお力です。今、手元に2冊の書籍「資料に見る京都大学教育学部の70年」と、南部広孝先生編著「検証 日本の教育改革—激動の2010年代を振り返る」があります。これらに目を通しますと、変革の荒波の中で、教育学研究科・教育学部が、わが国の教育

研究において、いかに学際的、先端的で、グローバルな展開を目指した改革を進めてこられたかを知ることができます。また、私もその一端に関わらせていただいた教育政策の全体像も俯瞰でき、多くの示唆をいただいています。今ほど社会の各分野、各組織で人を育てることが必要とされる時はなかったと思うほど、「教育」の重要性が高まる現代社会にあって、社会の要請に即応し、あるいは先駆けて、次代の教育研究を発信し、牽引する教育学研究科・教育学部の姿を、同窓の皆さまと分かち合えることを大変誇らしく思います。



さて、同窓会の目的は、「会員相互が親しみを深め、また研究の便宜に資する」です。私が会長を仰せつかったのは、何かしらの恩返しができる機会を与えていただいたものと有難く思っております。

本年度からは役員会に東京からも加わっていただきました。同窓会活動の拡がりや深まりを増す契機となればと考えています。同窓会は恩師や旧友との再会はもとより、各界で活躍される方々や留学生も交え、世代や国を越え、時に異業種交流の場となるなど、同窓という共通項から生まれる様々な楽しみ方があります。大学を離れ、これまで機会がなかった皆さまにもぜひ参加していただくと有難く存じます。

結びになりますが、会員の皆さまには、今後とも、より一層のお力添えをいただきますようお願い申し上げますとともに、皆さまのご健勝、ご活躍をお祈りいたしまして、挨拶とさせていただきます。

役員会より

(2022年3月24日役員会)

- ・京友会緊急生活支援事業について第6弾から第8弾の報告があり、第10弾で終了することが承認された。また、京友会緊急生活支援事業の寄附の募集も終了する事が提案された。
- ・京友会活動支援事業について募集案を見直し、今後のスケジュールや進め方について了承された。
- ・研究助成事業・国際賞・在学生活動支援事業の英語名について提案があった。
- ・今年度の総会の日程・スケジュール等に関して了承された。また役員会も含めてハイブリットでの開催を検討することとした。
- ・次回、令和5年度発行の会員名簿の発行方法について、名簿の必要性などと含めて話し合った。個人情報保護の観点からは冊子体・電子版双方にリスクはあること、冊子体はPCが不慣れでも閲覧可能な一方で電子版には利便性が高いことなどが議論された。結果、会員にアンケートをとって、その結果を踏まえて発行方法について検討することにした。
- ・卒業生・修了生への記念品の贈呈について。今年度も卒業生・修了生歓送会が開催できなかったため、卒業証書授与式の際に記念品を贈呈したことが報告された。また、在校生向けの寄贈品についても今回は見送ることが承認された。

(2022年7月9日役員会)

- ・令和3年度の京友会の事業について、京友会70周年事業・緊急生活支援事業も含めて事業報告と会計報告が行われた（総会で承認）。
- ・令和3年度国際賞受賞者、令和3年度研究助成事業、令和4年度研究助成事業対象者について報告された（総会で承認）。
- ・役員改選に伴い、新会長、副会長、新役員の推薦があった。
- ・令和4年度の京友会の事業について、京友会70周年事業・緊急生活支援事業も含めて、事業計画と予算案について了承された（総会で承認）。
- ・京友会の英語表記について、研究助成事業・国際賞の英語名について正式名称と略称が報告された（総会で承認）。
- ・名簿発行に関するアンケートの結果について報告（アンケートの集計結果は次ページをご覧ください）があり、はがきによる回答者は冊子体を希望し、Webフォームによる回答者はWeb版を希望する傾向があったほか、両者の発行を希望するものも一定数あった。これらの結果と自由記述の内容を踏まえ、令和5年度版の名簿発行はWeb版（会費を払った方と75歳以上の希望者に伝えられたパスワードにより、ダウンロード不可のデータを画面上で閲覧可能とする）を基本とし、そのうえで希望者には簡易的な冊子体も発行することが了承された。（総会で承認）
- ・会費の納入率が下がってきていることから、納入率を上げる為の対策として、複数年の先払いなどの制度について検討された。

令和4年度役員名簿（2022年度）

役職	氏名
会長	津田 仁
副会長	楠見 孝
	有田 禎宏
委員	沖吉 和祐
	南部 啓子
	鳶野 克己
	小林 哲郎
	杢野 雄一
	福西 清次
	服部 憲児
	瀧端 真理子
	高 篤 浩子
	石井 英真
会計監査	高根 雅啓
会計監査	松下 姫歌
筆頭幹事	久富 望
幹事	松本 いづみ

（役員は会計監査以外卒業年度順）

令和5年度発行の会員名簿の発行方法についてのアンケート集計結果
(アンケートを受けた発行方法については、前ページを参照)

	(回答方法)		合計	自由記述 (抜粋)
	フォーム	はがき		
今まで通り冊子版で発行	6	50	56	<ul style="list-style-type: none"> ・近年のデジタル化の波についていけず。 ・不要な人は申し込まなければいいので廃止という選択肢はないと思う。 ・私は某大学の世話人を仰せつかっていますが、個人情報関連の事情か近年の卒業生のご住所(連絡先)が空白で困っています。 ・ネットだと情報漏洩のリスクが高い。以前、某銀行の社員名簿をネット上でみたことがある。 ・色々とお手数だと思いますが、不要な人は申し込まなければいいので、廃止という選択肢はないように感じます。(プライバシーの確保等は大切だとは思いますが…)
Web版の発行	59	18	77	<ul style="list-style-type: none"> ・案内にも書かれていた通り、冊子形式は情報が少ないと思っていました。場所もとるので捨てようとしたこともありましたが、個人情報が記載されていて迂闊に捨てられずそのまま保管しております。ご年配の方など希望者のみ冊子版にするのが良いと思います。 ・将来的には全面的にウェブに移行するしかないように思います。ただ、いきなりだと反発も多いと思うので、次回の名簿発行からウェブに完全移行する旨を告知し、時間をかけて会員の了承を得るようにするのが一案かと存じます。 ・冊子の名簿が業者に流れて悪用されることもあるので、名簿が特に必要とは思いませんが、年配の方は欲しい場合もあるでしょう。例えば希望者に同級生の名簿のみ冊子で渡すなどして、基本的には配布なし、身分確認の上で、ネットで検索されてもいいとした人のみ検索可能にするなど、どうでしょう。 ・冊子発行は事務局の皆さまの大きなご負担になるかと思っています。令和ですのでWebのみで十分です。 ・会員の情報が必要な会員のみが利用できるものがあれば充分である。 ・本当は冊子を願いたいのですが、多額の経費が必要との事。若い研究者の方への為に充てて下さい。
冊子版とWeb版の併用	16	31	47	<ul style="list-style-type: none"> ・WEBのみとしたい所ですが、年重ねるとPC操作が面倒に感じます。 ・パソコン等の操作に不慣れなので。 ・頻繁に見るものではないが、やはり基本は見やすい冊子体であってほしい。 ・Webをプライベートで使わないので。高齢になるほど紙が絶対です。
名簿の廃止	11	13	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんど活用しないので。 ・必要な方々についてはわかっているので不要。名簿があると不要の勧誘などの連絡があり困惑する。 ・情報漏洩の可能性から廃止が安全。だが名簿希望が半数を超えれば危険性を自覚した施行も可。 ・活用しない為。 ・事務作業のご負担をかけるのが申し訳なく思いますし、私自身は必要性を感じない。
無回答	0	10	10	<ul style="list-style-type: none"> ・多数意見に従います。
合計	92	122	214	

令和3年度 京友会国際賞の選考結果

Araya 氏の論文は、記憶の心理学的研究の国際トップジャーナルである Memory & Cognition に掲載されたものであり、語彙獲得の最も基本的なメカニズムの1つであるヘップ反復効果が、これまで考えられていた以上はかなり広範な影響力を持つ現象であるということを示したもので、高い国際的評価を受けた研究である。加えて、本研究は本学の「戦略的パートナーシップ校」であるスイス・チューリッヒ大学との共同研究の成果が結実したのもであり、国際賞にふさわしいと判断する。

王氏の論文は、日本の長寿番組『中学生日記』が提示した中学生像・学校像の変遷をナラトロジーの手法を用いて考察したものである。本論文は、学校内部のあり方や青少年の心の問題に焦点を当ててきたこれまでのメディア研究の文脈とは異なり、同番組が学校や教師の立場をストーリーの中に包摂した「オルタナティブな言説」であると指摘した。また、マスメディアによる教育実践の可能性を再考する契機を提供する優れた論文である。加えて、留学生が本研究を行ったことは、本研究科のグローバルな発信の点でも大いに評価できる。

以上のように、いずれも受賞に値する素晴らしい論文であると判断し、二本の論文を受賞対象とした。二人の研究生活が世界に向けてますます発展されることを期待したい。

2022年5月11日 審査委員 小林哲郎・服部憲児

氏名	学年	論文題目
アラヤ クラウディア Araya, Claudia (コスタリカ共和国)	D2	The Hebb repetition effect in complex span tasks: Evidence for a shared learning mechanism with simple span tasks (複合スパン課題におけるヘップ反復効果：単純スパン課題と共通する学習メカニズムの証拠)
オウ レイビ 王 令薇 (中国)	D3	オルタナティブな「中学生問題」の構築過程——NHK『中学生日記』のストーリー分析を中心に

令和3年度 研究助成事業報告

助成期間 令和3年7月5日～令和3年3月31日

助成者	学年	講座	指導教員名	研究課題
ニ ナン 倪 楠	D1	教育認知心理学講座	齊藤 智	ワーキングメモリ・トレーニングによる「負の効果」の検討
ニシワキ ミオ 西脇 彩央	M2	教育・人間科学講座	田中智子	在外公館と留学生—明治期米国の場合—
オン シュウエイ 温 秋穎	D1	教育社会学講座	佐藤卓己	近代日本対中情報活動における中国語の運用—外務省官僚・岩村成允の中国語実践を例として
ニシオカ マユミ 西岡 真由美	D3	臨床心理学講座	岡野憲一郎	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大が糖尿病患者の心理面に及ぼす影響—周囲の人々との関係性に着目して—
ヒツワリ ジンペイ 櫃割 仁平	D1	教育認知心理学講座	野村理朗	俳句鑑賞中の感情の揺らぎが審美性評価に与える影響
イマムラ コウイチロウ 今村 光一郎	M2	教育社会学講座	竹内里欧	学習の場としての男性運動
ソン ショウ 孫 詩榕	D2	教育認知心理学講座	楠見 孝	The Effect of Trait Schadenfreude on Episodic Schadenfreude Based on Narcissism (自己愛人格に基づくエピソード的シャードンフロイデに及ぼす特性シャードンフロイデの影響)

■倪楠

京友会助成金によるご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。昨年度中にワーキングメモリ・トレーニングの「負の効果」に焦点を当てて実証研究を行い、トレーニングによる認知機能の変化のメカニズムを検討いたしました。

ワーキングメモリは、容量に制限を持ちながら、情報の一時的な保持と認知操作を行う動的なシステムであり、知能などの高次認知と強く関係しています。過去には、「ワーキングメモリが、筋肉と同じように鍛えられる」といったごく単純な発想から、ワーキングメモリ・トレーニングの研究が行われてきました。しかしながら、最近の研究からは、トレーニングの効果が極めて限定的で、ワーキングメモリ以外の課題成績（高次認知課題や知能検査など）の向上をほとんど導かないことがわかっています。トレーニングによって、ワーキングメモリの何がどのように変化したのかについての理論的説明が不足していることが、当該分野の大きな問題となっています。

本研究が依拠する認知ルーティン理論は、トレーニングによる変化を、当該の課題をうまくこなすための新たな認知的なスキル（ルーティン）の獲得とその自動化によって説明します。自動化したルーティンが後の課題に適合しない場合は、後の課題成績の低下というトレーニングによる「負の効果」が生じ得ると推論されます。そこで今回の一連の研究では、まず2段階のトレーニング法を用いて、空間位置逆順再生課題のトレーニングが、続く文字逆順再生課題のトレーニングの効果を低減させるという負の転移効果を確認しました。一方で、トレーニングの順序を逆転させると、文字逆順再生課題から空間位置逆順再生課題への負の転移は見られませんでした。この結果は負の転移効果の非対称性を意味し、「負の効果」がルーティンの獲得過程において生じる可能性を示しています。この可能性を検討するための3段階のトレーニング実験を、次年度も継続する予定です。

頂いた助成金は、実験参加者への謝礼及び研究資料の購入に充てさせていただきました。助成期間終了後も引き続き実験デザインを改善・計画し、研究に邁進いたします。貴重なご支援を、誠にありがとうございました。

■西脇彩央

私は、幕末以降明治期の米国への日本人留学生に注目し、当時の留学実態を明らかにするという目的のもと、研究を行いました。特に、1871（明治4）年から1882（明治15）年まで全権公使として米国に滞在していた吉田清成（1845-1891）と、当時の在米留学生との関わりに焦点を当てました。

京都大学には「吉田清成関係文書」という膨大な史料群が所蔵されています。そこには300通にも及ぶ、吉田公使時代の在米留学生関連の書簡が含まれます。これらの書簡を解読・分析し、当時の在米留学生の留学実態や、留学生を取り巻く環境を把握することに努めました。そして、そのような留学実態や環境の中で、公使吉田清成が担った役割や、留学生にとっての彼の存在について考察しました。このような作業を通じ、留学生の学習や生活の様子、また抱えていたトラブル等を、具体的に把握することができました。そして、吉田が少なくない留学生と直接・間接の接触を持っていたこと、一部の留学生に対しては、その進退や金銭の管理に深く関与していたことを明らかにしました。

留学をめぐる当時の法令や制度では、公使やその他外交官に対し、公的には留学生の監督権は与えられていませんでした。しかし、上記のような吉田と留学生との関係を見ることにより、制度と実態の差を明らかにし、留学の制度や環境整備の過程を具体的に示すことができました。

本研究を下敷きとして、修士論文を執筆しました。また、本研究の成果の一部は、西脇彩央「駐米公使吉田清成と留学生—1870-80年代の留学実態—」として『洋学』29号において公表予定です（2022年5月頃刊行）。

この度の助成金は、吉田清成の公使としての活動を知るため、東京の国立国会図書館へ赴いた際の交通費及び同施設での複写費、また当時の留学生に関連する史料の購入費に使用させていただきました。貴重なご支援を賜り、誠にありがとうございました。

■温秋穎

この度は、京友会研究助成事業に採択していただき、誠にありがとうございます。

本研究は、外務省官僚・岩村成允の情報活動と中国語実践を通して、近代日本の情報空間における中国語という言語の受容、およびその情報空間の変遷を解明しようとするものです。岩村成允に関わる史

料を可能な限り収集して、異なる種類の史料を組み合わせてながら検証を行いました。

本助成の助成期間においては、研究の成果を2021年8月に行われたヨーロッパ日本研究協会第16回大会(16th International Conference of the European Association for Japanese Studies)歴史パネル29「貫戦期の日本史のなかの中国」で報告を行いました。学会でいただいたコメントと意見を活用し、『京都大学大学院 教育学研究科紀要』第68号に「中国通外交官・岩村成允(1876～1943)の情報活動—中国語の使用という視点から」をタイトルとする論文を投稿して掲載されました。

岩村の中国語習得と外務省における中国語人材養成の関係については、まず彼の学歴と外務省留学生になった経緯を考察し、また、編纂された『北京正音 支那新字典』が対中外交にもたらした意義と、入省後に中国語能力を運用した初めての情報活動を明らかにしました。正式に外務省に入ってから、岩村は政務一課で勤務する傍ら、『支那新行政区表』を制作し、在中國領事時代には中国語新聞から中国語の情報収集を行い、在鄭家屯駐在期間の鄭家屯・四平街間電信電話線の架設や日中親睦会の設立などに際して中国語を通して中国人との交渉にも携わっていました。岩村が領事館から国内に戻って以降は、中国の現地で蓄積してきた中国と中国語に関する知が外務省内で活用され、さらに中国語語学教育の形で民間にも還元されたというプロセスが見られます。

いただいた研究助成金は主に、本研究関連の研究書・資料の購入と印刷、複写に当てさせていただきました。貴重な助成金をいただきましたことに、改めて心よりお礼申し上げます。

■西岡 真由美

この度は、研究助成をいただき、誠にありがとうございました。

本研究は、新型コロナウイルス感染症(以下COVID-19)の流行が糖尿病患者の心理面に及ぼす影響について探究するものです。糖尿病は、腎症や網膜症などの重篤な合併症が出現する病ですが、病が進行するまで無症状で過ごすことの多い病です。そのため、糖尿病患者は自覚症状がないにも関わらず、食事や運動などの持続的な療養上の努力が求められ、心理的苦悩も大きいと言われていています。一方、家族や同僚など、周囲の人々からサポートを得ていると感じる糖尿病患者は、血糖値もうまくコントロールされているという報告もあり、周囲の人々との関

係性は、糖尿病の療養において、心理的にも医学的にも重要であると考えられます。しかし、ソーシャルディスタンスを取ることが推奨されるなど、人々の生活にさまざまな変化を強いたCOVID-19の流行下においては、糖尿病患者にとっても周囲の人々との関係性に何らかの変化が生じた可能性があると考えました。また、その変化が療養生活とどのような関連があるのかについても探索したいと考えました。

そこで私たちの研究グループは、糖尿病治療を専門としている医療機関の協力を得て、質問紙とPRISM-TASKと呼ばれる投映法の課題、電話によるインタビューを組み合わせた調査を行うことを検討していました。しかし予備調査を施行したところ、投映法を自力で行ってもらうことが困難なことが判明したり、インタビューを行うなら対面で行う方が安心して話していただけるという結論に至ったため、今回は質問紙調査のみ行うこととしました。度重なるCOVID-19の流行拡大も重なり、研究計画の見直しが必要となりましたが、本調査に向けて着実に準備を進めております。

いただいた助成金は、医療機関への交通費や予備調査の謝礼、郵送費、文献の購入等に使用させていただきました。今後は本調査を実施して分析を行い、心理臨床学会や糖尿病学会などで発表することを目指していきます。ご支援いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

■櫃割 仁平

私たちのこれまで行ってきた研究では、ネガティブ感情ではなくポジティブ感情のみが俳句の美的評価を説明したり(Hitsuwari & Nomura, 2021)、認知的曖昧性が俳句の美的評価を下げたりする(Hitsuwari & Nomura, in revision)等の知見を見出してきました。一方で、芸術鑑賞の心理学において、ネガティブ感情(Mennighaus et al., 2017)や認知的曖昧性(Muth et al., 2015)の重要性が繰り返し示されており、次なる研究ステップは、俳句鑑賞中に起こる感情・認知の変化プロセスと美的評価との関係をより丁寧に検討することだと考えました。そこで本研究では、俳句の各パート(上五・中七・下五)を段階的に評価し、かつジョイスティックによる連続的な感情指標を追跡することにより、感情と認知の変化が俳句の美的評価に与える経時的影響を検討しました。つまり、俳句の上五が提示された段階で美しさや曖昧性、感情の評価をし、さらに中七が提示された段階で同じような評価を繰り返してもら

いました。また、ジョイスティックで自分の感情を報告してもらう間の瞳孔径も測定しました。113名の京都大学生を対象とした実験室実験の結果、ネガティブ感情の低下や感情的・認知的曖昧性の解消が「俳句の美」を説明したり、瞳孔径が鑑賞中にだんだん小さくなっていったりすることを明らかにしました。この瞳孔径の大きさは曖昧性を反映していると考えられ、確かに俳句鑑賞をしているうちにだんだん曖昧性が解消されていく様子が瞳孔の大きさからも示唆されました。これらの結果によって、俳句鑑賞中の反応を1時点のみで測定するのではなく、変化過程に注目しながら多時点で捉えていくことが重要ということを変更して明らかにしました。本研究の成果は2022年3月1日に行われた日本認知心理学会第19回大会で発表しました。また、現在国際誌への投稿を目指し、論文を執筆中です。できるだけ早く結果を共有できるように精進します。

■今村 光一郎

「今や教育の対象は中高年にまで広がってきているはずだが、とりわけ男性たちの学びの動機と場については、理想と実態の両方が分からないままではないか」という私の関心は、研究助成金のお力添えで知見を生むことができました。

私の研究は、男性学と社会運動研究の蓄積をもとにした、中高年男性たちの「学習」がテーマです。具体的には、反暴力・ジェンダー平等の理念をもつ男性運動をフィールドに、男性たちの社会運動内部に見られる学習の動機と、中年期以降の男らしさの捉え直しに迫りました。最大の問いは、暴力問題や性・ジェンダーの問題の当事者には見えない男性たちがなぜ、反暴力・ジェンダー平等の理念のために啓発運動を行なっているのか、というものです。

研究手法は、フィールドワークとインタビューです。インタビューへの謝礼、フィールドワークに赴く際の交通費、および社会運動研究の書籍の購入費に、京友会研究助成事業助成金を充てました。

明らかになったことは、大きく三つです。まず、男性たちの運動が女性運動をリスペクトし、運営ノウハウを参考にしてきたことです。性・ジェンダーの問題に男性の立場から取り組むには、彼女たちの影響が欠かせません。

次に、彼らが参加を続ける要因です。周囲の女性たちの困難に触れた経験と、暴力やジェンダーの問題を学ぶことへの知識欲が、中高年男性たちの意欲を高めていると分かりました。彼らは周囲の女性た

ちの経験をきっかけに、解決するための知識と手段を求めて、ポジティブに取り組んでいました。

最後に、老いと交友関係の変化についてです。参加者の男性たちは、肉体・能力面での老いに直面しつつ、学習への動機を持続させていました。知的な「成長」を目指して自己研鑽に取り組むことが、若者や女性との好ましい関係につながっていることが分かりました。

社会の〈若者化〉によって中高年にも成長が求められる時代に、社会問題をめぐって学習する姿勢が自己研鑽を生み、他の世代との共存や関係構築につながっています。必ずしも社会問題の主な当事者でない男性たちが自ら学ぶ場として社会運動を選んでいることは、特権性または被害者性に偏らない立場での啓発・教育のあり方、新たな「男らしさ」の成熟のあり方を示唆しています。

■孫 詩榕

我々は、他者の不幸を知った時に、喜んでしまうことがまれにある。日本における“他人の不幸は蜜の味”という経験は、欧米では“シャーデンフロイデ” (Schadenfreude) と呼ばれている。今回の助成金で支援を受けた研究では、シャーデンフロイデと関係性攻撃傾向の関係を調査した。

General Strain Theory (GST) (Agnew, 1992; 2001) によると、緊張を引き起こす出来事は非行への関与と正の関係があると主張しており、以前の研究では、オフラインいじめの被害がネットいじめの関与に関連しているという証拠が示された (Jang, Song, & Kim, 2014)。本研究では、GSTを参照して、ダークトライアドと特性/エピソードのシャーデンフロイデが関係性攻撃の被害と関与の間に仲介的な役割をオンラインで調査した。18~28歳の248人のデータ (101人の男性) が収集された。2つの日本のシャーデンフロイデ尺度の他、質問票には、Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J)、オンライン/オフラインの社交頻度、関係性攻撃的な行為の被害および関与の頻度に関する質問が含まれている。

その結果、関係性攻撃の被害がその関与を予測したことを示したが、関係性攻撃の被害とその関与の間のダークトライアドと特性シャーデンフロイデの仲介の役割を予測する連続仲介モデルは拒否された。単純仲介モデルを通じて、ダークトライアドは関係的攻撃性の関与を正に予測し、ダークトライアドと関係的攻撃性の関与の間の特性シャーデンフロイデの仲介的役割を明らかにした。

連続仲介モデルが拒否された原因として、考えられるのが今回の実験設定は General Strain Theory (GST) と異なることである。研究結果では、関係的攻撃性の被害がそれへの関与を予測したことを示したが、GST では、ストレスが犯罪や非行の直接の原因であると想定しており、被害と関与の間の時系列のおよび因果関係を強調した。ただし、今回の研究では、時系列関係も因果関係も制御されなかった。参加者は、被害と関与の頻度にのみ回答した。

さらに、関係性攻撃から被害を受けた人が必ずしも犯罪的や非行的な方法で反応するわけではない。考えられる他の要因（例えば、コーピング行動）がこの因果関係を仲介する可能性がある（Broidy, 2001）。したがって、他の要因を考慮して、また被害と関与が時系列である場合のみ、ダークトライアドと特性シャードンフロイデは関係性攻撃の被害と関与の関係を仲介する可能性がある。

令和4年度 研究助成審査会選考結果

助成期間 令和4年7月11日～令和5年3月31日

応募は6件あり、申請書にもとづいての審査を行い、研究目的・研究計画・助成金の用途・研究業績書・指導教員の推薦書の記載にもとづき、研究内容の説明の明瞭性や研究計画・助成金の用途の妥当性などを協議した。

その結果、研究的な価値が認められ一定の水準に達していると判断された6件について採択し、1. 研究計画に示される研究方法についての明瞭性、2. 申請された助成金の用途の研究計画に対する妥当性、3. 募集要項に対する申請内容の妥当性、などを考慮し、予算上の上限額の範囲内で配分の判断を行った。

2022年5月22日 審査委員 瀧端真理子・石井英真

助成者	学年	講座	指導教員名	研究課題
ヨシノカ ユイ 吉岡 佑衣	D1	臨床心理学講座	田中康裕	日本人の夢感情の発達的变化に関する横断研究
フジモト コウヘイ 藤本 航平	D3	臨床心理学講座	田中康裕	ASD 者の語りの意義—物語にならない物語について—
オカノ ヒロヒト 岡野 裕仁	M1	教育認知心理学講座	野村理朗	社交不安と社会的比較志向性、マインドフルネスの関連
アベ ユカリ 阿部 由香梨	D1	教育認知心理学講座	Emmanuel Manalo	Self-Efficacy of Japanese English Teachers on Critical Thinking Instruction in English Language Teaching (日本人英語教師の批判的思考力指導に関する自己効力感に関する研究)
トウ シカン TAO ZHIHAN	M2	教育社会学講座	佐藤卓己	大阪商船会社広報誌『海』のメディア史：船旅にみるモダニズムとナショナリズムの観光空間
シマミ ユキ 嶋見 優希	D3	臨床心理学講座	高橋靖恵	オンラインと対面での描画体験の比較検討

令和4年度研究助成事業助成対象者コメント — 助成を受けて —

■吉岡 佑衣

この度は令和4年度京友会研究事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

睡眠中にみられる夢は、心理療法における治療的ツールであり「夢分析」として広く用いられてきました。私は、夢の感情面に焦点を当て、その臨床的

有用性を実証的に示す研究を行っております。夢は多彩な感情を伴い、時に恐怖で跳び起きるような強烈なインパクトを持ちます。そのような夢の感情は、心理療法において有用な着目点であることが臨床家によって論じられています。さらに、夢の感情は、夢見手のパーソナリティや心理的状态と密接に関連することが明らかになっています。本研究では、夢

の感情の発達的变化について知ることを目的とし、日本人の青年期、成人期、老年期それぞれのデータを比較検討します。心理療法には様々な年代の人が訪れ、心理的支援の方法として夢が用いられます。しかし、日本人の夢の感情の年代による違いや特徴について調べた研究はありません。セラピストが夢を扱う際にも、年代ごとの特徴について把握することが必要であり、本研究は夢を用いた心理的支援を行う上での基礎的な知見として有用であることが予想されます。手法として、質問紙調査やオンライン調査によってそれぞれの年代の夢に関するデータを取得し、統計的に分析します。

頂いた助成金は調査費用や、研究に関する資料の収集のための費用に充てる予定です。本研究によって得られた結果は学会発表や論文執筆によって報告いたします。ご支援に御礼申し上げますとともに、研究成果を示し、学問の発展に貢献できるよう努力して参ります。

■藤本 航平

この度は令和4年度京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私は、自閉スペクトラム症（以下ASDと表記）者についての研究を行なってきました。その内容は、これまでASD者側の社会性の障害という「欠陥」に一方向的に原因を帰せられがちであったコミュニケーション上の問題について、定型発達者との認知的・言語的な差異の観点から改めて取り扱うというものでした。今回の研究は、ASD者の言語表現における意味的傾向についてより詳細に考察・検討を行おうとするものです。言語学・認知科学・臨床心理学という複数分野の文献を詳細に調査することにより、ASD者の言語的特徴についての新たな理解と支援の可能性を示すことができれば幸いです。また、これまで長らく心理療法における意味把握方略のスタンダードを担ってきたのは所謂「物語」というパラダイムでした。本研究においてそれとは異なるような意味把握の方略について示唆することができれば、今後、臨床心理学の文脈にも深く関連してくるような興味深い知見となる可能性もあると考えられ、その点は調査者として期待しているところです。

いただいた助成金は、主に文献購入費へと充てさせていただきます。貴重なご支援に改めて深く御礼申し上げますとともに、本研究が実りのあるものとなるよう尽力していく所存です。

■岡野 裕仁

この度は、令和4年度京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。私は、不安や抑うつといった精神病理やネガティブ感情を軽減させるような介入やパーソナリティ特性について、質問紙調査や心理学実験を行うことを通して研究しております。

人前に出てスピーチをしたり、他者と会話をするような状況において感じる緊張や不安を社交不安と呼びます。今回実施した質問紙調査によって、社交不安が、他者と自分とを優劣の観点から比較する傾向の高さと関連することが明らかになりました。一方で、優劣の評価を含まないような他者との比較は、社交不安の高さと関連しないことがわかりました。

それでは、他人と自分とを優劣で比較しないようにするにはどうすればよいのでしょうか。そのための手法の一つとして考えられるのが、瞑想などのマインドフルネス傾向を高める介入です。マインドフルネス傾向は、“今ここ”の瞬間に意識的に気づき、評価的な判断を下さない傾向をさします。今回の調査によって、マインドフルネス傾向が高い人ほど、他人と自分とを優劣の観点から比較することが少なくなり、結果として社交不安も低くなるというモデルが示されました。

今回の研究によって、自他を優劣の観点から比較することが社交不安のリスク因子となるものの、そのような比較を行う傾向は瞑想などのマインドフルネスを高めるような介入によって軽減させられる可能性が示唆されました。この結果は、認知心理学のみならず、心理・精神科臨床にも貢献しうるものであると考えており、今回頂いた助成金は今年度9月に学会で本知見を発表させていただくための費用として使用させていただく予定です。

■阿部 由香梨

この度は研究助成に採択していただき、ありがとうございます。助成をいただいたことに恥じないような研究をしなくてはと、身の引き締まる思いであります。

私の研究テーマは、「日本人英語教師の、批判的思考力を指導することに関する自己効力感」です。私は高校の英語科教諭として10年ほど、英語ディベート指導に携わってきました。その中で「思考力と言語力の密接な結びつき」に気づき、さらに深く言語習得について学ぶため、休職してオーストラリ

アで修士課程を修了しました。修士論文のテーマは「日本人英語教師と学生の英語ディベートに関する認識」でしたが、英語ディベートによって、特に批判的思考力が良い影響を受けるという認識が示されました。しかし、英語ディベート自体はまだまだ学校で活用されておらず、批判的思考力も、基本的には日本の教育において明示的に扱われていないように思われます。

こうした背景が、今回の博士論文のテーマにつながっています。まず、教師は「ディベートが批判的思考力を伸ばす」という評価をしているものの、批判的思考力についてどんな理解・誤解をしているのかを明らかにします。さらに教師の「自己効力感」についても調査します。これはある行動に対しての自信レベルのようなもので、教師のあらゆる行動に影響を及ぼすとされています。今回助成を受けた研究においては、日本人英語教師の認識についてさらに深く研究し、より効果的な教師教育に応用していく所存です。

■ TAO ZHIHAN

この度は、助成に採択していただき、まことにありがとうございます。助成に採択していただけることによって、自分の研究テーマに自信をもつことができ、今後の研究の励みとなります。

私は、近代日本の船旅をめぐる想像と記号の消費について研究しています。移動/モビリティーズの重要性を考えた上で、鉄道、自動車、飛行機など、移動を媒介する「メディア」が焦点に当てられます。ところが、グローバル化を考えると、なぜ「船」が入っていないのかという問いがあります。近代社会において異文化の交流を支えてきた交通方式として、その移動の文化史への解明を試みます。

これからの研究は、大阪商船株式会社が発行した雑誌『海』(1924-1943)がもつ機能を解明しつつ船旅の表象の創出と、そのイメージ共有のなかで船への役割期待を明らかにします。『海』は、多くの文化人が登場したメディアとして、文化誌の性格を備える雑誌でありながら長い時間を経て社会全体の文化や規範に影響を与えることがあり得ます。研究手

法として、テキスト分析と歴史資料分析を中心に行っていこうと考えています。

いただきました助成金は、資料収集のための費用にあてる予定です。本研究で得られた結果は、学会発表及び論文執筆の形で発表いたします。ご支援をいただきましたことに改めて感謝申し上げますとともに、有効に活用できるよう研究に邁進する所存です。

■ 嶋見 優希

この度は、京友会研究助成事業にご採択くださり、誠にありがとうございます。

私たち描画研究会は、今回助成を頂く研究において、オンラインカウンセリングと対面カウンセリングでの描画法における体験の違いについて、調査を通して検討していきます。

コロナ禍において、接触を避け利用することのできるオンラインカウンセリングは改めて注目され、感染のリスクを避けるために用いられてきました。オンラインカウンセリングでも対面と同様の効果が多くの場合得られることは、様々な研究で指摘されてきています。また、カウンセリングでは、対話の他に描画法や箱庭療法といった投影法と呼ばれる技法を用いることがあります。この技法は、クライアントの無意識の動きを捉え、クライアントの見立てに活かすことができるだけでなく、体験自体が治療的に働くと言われていています。ただし、これらの技法は対面状況を想定して開発されたものであり、オンライン状況であっても問題なく効果があるのかどうか、十分に検討されてきているとはいえません。

そのため今回の研究では、オンライン状況と対面状況の両方において描画法を体験してもらい、それぞれの体験についての語りの分析と描画自体の分析を通して状況による体験の質の相違点を検討していく予定です。この研究によって、オンライン状況で描画法を用いることの限界と有用性の一端を明らかにできると考えています。

いただきました助成金は、調査費用として活用させていただきます。貴重なご支援に厚く御礼申し上げますとともに、本研究が心理学の発展に寄与するものとなるよう、全力で取り組んでいきたいと思えます。

追悼

本山幸彦先生を悼む

京都大学名誉教授 辻本雅史

京都大学名誉教授の本山幸彦先生が2022年2月20日に永眠されました。享年97歳でした。

本山先生は1924年のお生まれ。1949年京都大学(京都帝国大学)文学部哲学科倫理学専攻卒業後、京都大学助手・講師(人文科学研究所)、1958年京都大学助教授(教育学部・教育史講座担任)、1972年教授、1988年に定年退官されました。その後、関西大学に1995年まで勤務されました。

数多い先生の業績のなかでも、日本教育史の領域で特筆されるのは、日本近代教育政策史に関する三部作、『明治教育世論の研究』(1972)、『帝国議会と教育政策』(1981)、『京都府会と教育政策』(1990)です。

1960年代は東大の海後宗臣氏を中心としたグループによる、公文書をもとに教育勅語体制・教育法令勅令主義の確立過程の実証的研究が注目されていました。本山先生は、海後氏らの、絶対的な天皇権により上から一方的に作られるスタティックな教育史像に違和感をもち、国民各層の教育要求とのせめぎあいの中で教育政策を捉える見方を提示されました。人文研の研究スタイルに倣い、共同研究会を組織し継続してきた研究成果が上記三部作に結実しました。まず「教育世論」として、経済界、ジャーナリズム、教育界、宗教界等の教育意見を捉えた第一編著、次いで帝国議会の議論に国民の教育要求を見出した第二編著、さらに各地域の教育要求を京都府会の議論によって解明した第三編著を上梓しました。要するに、各層の教育要求と政府とのせめぎ合いの過程を、ダイナミックな近代教育政策史像として提示することに成功し、京大グループの存在感を高めました。この研究会は、多くの優れた研究者を輩出したことでも注目されました。

本山先生は、教育の意味を、教育世界の外側(とりわけ政治や思想)との関連から考えてこられました。

『近代日本の政治と教育』(1972)、『政党政治の始動』(1983)、『明治国家の教育思想』(1998)、『近世国家の教育思想』(2001)等の単著に、その知見が示されています。

ただ先生は、日本倫理思想史が研究の出発点でした。人物の思想研究への情熱は、終始変わらぬものがありました。初の単著『明治思想の形成』(1969)は、幕末維新期の思想のうちに近代化の意味を探った好著で高く評価されました。本居宣長、吉田松陰、横井小楠の評伝も執筆、各思想家への思いの強さが込められています。先生は、法学部で長年「日本政治思想史」を講じられましたが、それは先生ご自身が楽しみにしておられた講義でした。古希を機に宮崎市に移住された後にも執筆を続けられ、卒寿のころには西村茂樹の原稿を書いている、と言っておられました。最期まで、研究への情熱を失わなかった稀有な先生でした。

本山先生の授業は、寸鉄人を刺すほど激しく厳しいものがありました。演習は最終講時に組まれ、議論が尽きるまでのエンドレス、時には場を移しての激論もしばしばでした。率直な発言が常でしたが、実は根っこの部分は優しい気配りと情に満ちていました。正義感と人情に富む先生のお人柄を慕う後進も多く、退職記念論文集には、内外29名もの研究者が寄稿しました。三度の渡米研究で外国人の知己も多く、早くから留学生を受け入れたことでも時代に先駆けた国際人でした。欧米の門下生の翻訳で先生の英文論文集 Proliferating Talent (ハワイ大学出版、1997) が編まれましたが、先生に学び、慕う欧米人の多さを物語っています。

ご著書の中と私たちの心のうちに、先生はたしかに生きておられます。本山先生の学恩に感謝しつつ、ご冥福をお祈りいたします。